

## △「先生、来年もドクさん来てくれるの？」

ードクさんと子どもたちが出会ってー

お か じ ま  
大阪市立南恩加島小学校  
白川 洋二

「ドクさんが南恩加島小学校に来てくれる。」と始めに騒ぎだしたのは、子どもたちの親でした。小学校の子どもにとっては、自分たちと少し離れた存在であり、ベトナム戦争はもう一つピンとこない感じがありました。でも親の代では「ベトちゃん・ドクちゃん」の話として強烈な印象を持っていました。

この機会を利用して、子どもたちにベトナム戦争を強烈に印象づけたいと考えました。今回のパンフレットを教材にして、ベトナム戦争の学習を人権総合学習として位置付け、学習を始めました。



子どもたちにとって最も印象深かったのは、ダイオキシンの影響による、ベトナムの子どもたちの「被害」でした。しかし、学習を重ねる中で、ドクさんの両親への思いやつらさにも心が向き始め、理解するようになってきました。

パソコンを使い、「枯葉剤被害」の項を見つけ、クリックするとツーズー病院のホルマリン漬けの胎児の写真や被害の実態、そして「ベトちゃん・ドクちゃん」が結合していたときの写真も出てきました。この学習に取り組まない限り目にはなかつたろうと思いました。

子どもたちの反応は、「こわい」とか「きしょく悪い」とかの声は聞こえず、予想していたよりもはるかに現実を見つめようとしていました。

「先生、すごいな。枯葉剤てこわいな。」「なんぼ戦争やいっても、…。」「二人の両親はなんで二人を棄てたんやろ。会いたないんかな。」「自分やったらどうやって生きていくんやろ。」



ここでさまざまな感想をもった子どもたちは、ドクさんに会った瞬間、なぞが解けたような顔になっていました。ドクさんのたくましさに、明るさに触れ、そして、一緒にサッカーをしたことで、それは確信に変わったようでした。

ドクさんは南恩加島の子どもたちに、文字通り強烈な印象を残してくれました。同時に戦争に対する怒りも確実なものにしてくれました。

私たちの学校には「平和を願う 16 地蔵のモニュメント」があります。そのモニュメントにドクさんがこうべをたれてくれたことも、子どもたちにとって大きな喜びだったようです。自分たちが作ったモニュメントの銅鐸を「ドクさんがたたいてくれた。」といつまでも話してくれていました。

中央公会堂でドクさんが「日本に来て、一番印象に残ったことは。」の質問に「大正区の南恩加島小学校の子どもたちと出会ったことです。」と話してくれていたよ、と伝えると拍手と「やったー」の声が飛び交いました。

今年度になり、何人かの子どもたちが、毎日放送の「ちちんぷいぷい」で放送されたことを伝えてくれました。一人の親はそれでDVDに録画して届けてくれました。見逃した子どもや親が多くいましたので、6月に日曜参観が予定されているのをとらえて、

授業参観の場で私の学年の親と子どもに見てもらうことにしました。

なかにはドクさんの「親への思い」を語る場面になると、涙を流す人もいました。参観の後、「先生、ダビングして。」とテープを持ってくる子どもや親がいたことも、いかに強烈な印象を受けたかの証しだと思っています。

参観の終わった日、一人の子がぼつりつぶやきました。「ドクさん、来年も来てくれるのかな。」聞きとがめた周りの子が「あほか、そう何回もこれるか。」と言いながら、後は黙ってしまいました。おそらく気持ちは同じだったのでしょう。

この子たちが成人し親となったとき、ベトナム戦争の怖さ、愚かさ、ひいては戦争への怒りをその子どもに語ってくれることでしょう。「お父ちゃんやお母ちゃんは、ドクさんに会うたんだよ。」と胸を張って話していることでしょう。その話の中で平和について、気負うことなく話してくれるでしょう。



南恩加島小学校では、この体験を大切に記憶し、「16地蔵」を中心とした平和学習の貴重な材料として残して行きます。

最後になりましたが、ドクさん招聘に尽力されたMOAのみなさんに心からお礼を申し上げます。

ありがとうございました。